

令和５年度第２回 ひきこもり支援協議会 議事録
(主要な質疑応答及び結果)

開催日時	令和６年３月１５日（金曜日） 午後６時３０分～午後８時３０分
会場	本庁舎 ５階 ５０９・５１０号室
出席者	【委員】文京学院大学人間学部人間福祉学科 教授 中島 修、 東京学芸大学教育心理学講座 准教授 福井 里江、 NPO KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 事務局長 上田 理香、 NPO ワーカーズコープ事業推進本部 事務局長 牧野 斉子 櫻和メンタルクリニック 院長 山野 かおる、 池袋市民法律事務所 所長 釜井 英法、 豊島区民生委員児童委員協議会会長 山本 ナミエ、 小杉 順二、小暮 和美、池袋保健所健康推進課 係長 松川 君子、 豊島区民社会福祉協議会 共生社会課長 田中 慎吾、 豊島区 保健福祉部長 田中 真理子 【オブザーバー】NPOインクルージョンセンター東京オレンジ 三浦辰也、甲斐正大 仲俣実穂 【事務局】豊島区 自立促進担当課長 水上 千春
傍聴者	なし
会議次第	開会 ○ 挨拶（中島会長） 議題 - 令和５年度の豊島区ひきこもり支援の取り組み状況についての報告 ・ひきこもり UX 女子会・ママ会【資料 1-1】 ・ひきこもり合同相談会・講演会【資料 1-2】 ・広報としま生きづらさサポート特集号【資料 1-3】 ・ひきこもり休日相談窓口 など - 令和５年度の豊島区ひきこもり相談窓口の実績について【資料 2】 - 豊島区ひきこもり支援３年間のまとめ（案）について【資料 3】 - 各委員からのご意見・情報交換（最近のひきこもり支援の状況など） 閉会

資 料	・ 次第 ・ 資料 1-1 ひきこもり UX 女子会・ママ会の参加状況とアンケート結果 ・ 資料 1-2 合同相談会・講演会の参加状況とアンケート結果 ・ 資料 1-3 広報としま生きづらさサポート特集号とアンケート結果 ・ 資料 1-4 広報としま ひきこもり相談窓口だより一覧 ・ 資料 1-5 ひきこもり情報サイト（X・ブログ含む）の修正及びアクセス数 ・ 資料 2 相談窓口の実績 ・ 資料 3 豊島区ひきこもり支援 3 年間のまとめ（案） ・ 参考資料 1 豊島区ひきこもり支援協議会 委員名簿
-----	--

主要な会議内容及び質疑応答について

開 会

○ 挨拶 中島会長

- ・ 開会の挨拶

○ 挨拶 田中委員

- ・ 新しく担当になった挨拶

議 事

1 令和 5 年度の豊島区ひきこもり支援の取り組みについての報告

- ① ひきこもり UX 女子会・ママ会について【資料 1-1】
- ② ひきこもり合同相談会・後援会について【資料 1-2】
- ③ 広報としま生きづらさサポート特集号について【資料 1-3】
- ④ その他の説明 ひきこもり休日相談窓口など

（事務局）概要について説明

（会長）皆様から感想や意見をいただきたい。

（委員）広報は他区を見ても、類を見ない素晴らしい情報発信になった。広報としまの中で「あなたらしい生き方、応援します」に目を引かれた。また、ひきこもりを悪いとかひきこもりを直さなくてはいけないというようなイメージを払拭している点が良いと思った。「ご本人以外の相談」という記載は、家族が見たときに相談してよいのか不安になる可能性もあるため、家族の相談とか親や兄弟、身内の方と具体的に書いてもよいのではないかと思った。支援というと何かをしなければならないという感じを受けるため、情報サイトの「支援・メニュー・相談」の中に「あなたらしい生き方を応援します」という標語があるとよい。

（会長）合同相談会の講演会は、参加者が区民のみであった。広域連携が必要なため、このようなメッセー

ジを送り続けることが大事だ。

2 令和5年度の豊島区ひきこもり相談窓口の実績について【資料2】

(事務局) 概要について説明

(副会長) 成果が上がっているという印象。特に本人の相談が半数を超えているのは画期的だ。家族と本人で相談方法に違いがあるのか。

(相談員) 違いはあまり感じていない。家族が働いていて来所が難しいが、一度来ることができたら来所での相談となるケースや、一方で本人が外に出るのが難しいということであれば、メールや電話で相談が続くというケースもある。どちらが多いというような印象は持っていない。

(副会長) それはそれで興味深い。電話でもかけてくださるということか。

(相談員) 家族、本人ともに電話をかけてくださる方も多い。

(副会長) 今まで繋がらなかった方々が繋がるようになったと思うが、どんな層が増えたのか、印象などあるか。

(相談員) 年齢の高い方が、繋がり先や関われる場所がなく、外に出づらくなっていて、この窓口に連絡してもよいのかといった連絡が増えている印象。逆に20代は多い状態が続いているような印象。

(副会長) 中高年層が就労などで繋がり先を求めており、良い感じで浸透していると感じた。相談しやすい雰囲気作りというのが、様々な広報活動などから上がってきていると思う。広報紙に自分が引き付けられるキーワードが何種類も載っているのがすごくよいと思う。相談はハードルが高く、相談という言葉には、何か自分ができないことがあるとか、何か変わらなければならないとか、そういうイメージがつかまとう。だからそうではない言葉も出すことで、そういうメッセージが届いているのではないかという気がした。相談したけれどそれきりで終わってしまうということをよく聞くので、何度でもという言葉で覚悟を持って、表に出しているのがすごくよいと思った。

(相談員) 延べ件数自体は12月末時点で出しているが、3月までで月200件ぐらいあるため、去年よりは延べ件数として伸びるのではないかと考えている。

(会長) やはり窓口の周知が色々な人に伝わってきているし、これだけ電話でくるのには驚いた。最初はメールやSNSのイメージが強かったけれど。とても優しいメッセージが伝わっているのではないかなと思う。

(委員) 相談件数が増えたのも広報が理由に入っていればよいと思う。ひきこもりの方をすぐさま就労に繋げるのではなく、どんな生きづらさを抱えているのかというところからのスタートが素晴らしい。色々な形の悩みが窓口で繋がっていくとよい。また、来所が多く、驚いている。やはり顔が見える、

声が聞こえる、実際にどういう状況なのかを電話とメールとは違ったもので判別できるということがもっと増えるといい。

(会長) 相談員の写真を入れる等、顔の見える関係になればよい。

(事務局) 協議会で相談員の顔をいれるといった意見があったことを重視し、どんな人が相談にのってくれるのかという不安感をとるために意識して掲載した。

(会長) とても良い。区長メッセージは力の入れ具合が伝わる感じがあってよい。

(委員) ひきこもり支援のあり方がとても温かいものだと思っている。支援という言葉がいいのか、相談を受けるという言葉がいいのか、もっとそこに温かみや柔らかさのある言葉があればよいと思っている。対応する人と人との繋がりや関係がひきこもり支援の根底にあるのだらうと思った。このひきこもり支援や対策が豊島区のあらゆる相談支援のモデルになり、この考え方がもっと浸透できればよいと考えている。

(会長) 支援者主体になりすぎないようにしないといけない。対話やオープンダイアログは大事なキーワード。支援という言葉を使うか、サポートという言葉を使うかどうか。

(委員) 1回の相談で終わるのではなく、電話をしたり、相談をすることで、自分以外の誰かと繋がるというイメージがわくように、広報するのがとても大事でよいと思った。1人で悩まなくていい、誰かに話をするというのがこの窓口なのだとということがよく伝わる広報だと思った。豊島区のひきこもりの取り組みが地域の中の色々な場所で繋がってできると、誰でも暮らしやすい地域作りに繋がっていくような気がして、色々な生きづらさを抱えている方も地域で暮らしていけるというイメージが持てるのではないかと思った。

(委員) ひきこもり相談窓口の実績の中で、初回相談時の相談傾向、その他不明の方もかなりいると思う。相談事は決まっていなくても、なにか理解してもらいたいとか、受け止めてもらいたいとか、そういう気持ちがあって、相談窓口に声をかけてこられる方もいると思うので、まずそこを大事にしていくのがよいと思った。また、どこかに繋がるとか相談して何かをするとか、何か動くということは大事だとは思いますが、その前に、繋がりを感じるとか、受け止められた感覚を持つというのがすごく大事だと思う。それは支援する人も、される人もあまり関係ないように思う。お互いに支え合う、対応するというのを大事にやっていくのがよい。

(会長) 相談というと必ず何かしなくてははいけないとか、何か具体的な成果を出さなくてははいけないとか、そう思うと苦しくなる。相談する方も受ける方も双方にとって、それが緩やかになると非常にやりやすいだろう。

(委員) 温かみを感じさせる作り方を広報でしており、言葉の使い方や温かみというのが、実際の相談の現場でも実践されているというのがアンケート結果に表れている。相談者は50代の方が少なく、そ

の他は各年代でほぼ同じぐらいの割合で均等になっているように見受けたが、全世代で相談利用されているのは良い方向で進んでいると思った。

(会長) 豊島区で調査を最初に行ったときは、本人からの相談が多かったが、広報紙を全戸配布し、丁寧に広報したら、家族の相談がすごく増えた。また今は本人が増えてきているので、メッセージを丁寧に出してきた成果ということなのか。

(事務局) 家族からの相談は他自治体を聞いても多い。本区の特徴として、最初は本人の相談が多いと私どもも聞いている。それは豊島区が一人暮らしの割合が多いせいもあるかもしれないが、逆に広報のおかげで家族からの相談に繋がり、また家族から本人に繋がるというよい巡りができているのではないかと考えている。

(委員) 一人暮らしで、本人からの相談割合はとっているのか。

(相談員) 令和5年12月5日付のデータでは、2020年(令和4年度)は、単身は大体15%ほど、同居が52%で不明が33%。今年度は12月末時点で単身が38%、同居は44%で、不明が18%。基本的に同居が割合としては多い。単身で家族からなのか、本人からなのかが今すぐには出せないが、どちらもある。

(会長) ひきこもりのケースを地域で見えてきて、豊島区の特徴や変化を見てどうか。

(委員) この3年間で相談者の層が変化したり、広報の仕方や工夫等である程度届いたところ、届かなかったところに情報が届くようになって、相談が多様になってきた。今ひきこもりの窓口の主婦でひきこもりであるといった層が来ているのか、相談があるのかどうか伺いたい。ある程度こういう層には情報が届いて、でもこの層になかなか相談が少ないので、強化していくといった変化が今後つけられるのかどうかも含めて、考えを伺いたい。

(会長) 子育てを経験している女性がひきこもっている状態というのをそんなに取り上げてこなかったかもしれない、いかがか。

(相談員) 相談にいらしている。数が正確に出せないが、主婦でいろいろな理由で家から出づらくなっている、身体的なご病気があったり、精神的な攻撃がある方もいらっしゃるし、足腰が弱ってきていて、ご年齢的なものもある。そういった主婦の相談というのは、電話が多い印象。女性が電話で連絡してお話される方が多い。今マルエツにチラシを置いていることもあり、主婦が買い物のときに見て、電話したという方もちらほら来ている。

(会長) スーパーにチラシを置くことにも効果があるのかもしれない。

(副会長) ママたち同士の付き合いもなかなか厄介で、目立つママの中で気後れしたり、ママをやりながら働く人も増えているので、そういうところで繋がっていない自分から、ひきこもりを感じられる

方がいる。ひきこもりという言葉が何を指すのかというイメージがどんどん広がっていくのだと思う。広報して、相談件数が増えると、ときには、これは何がひきこもり状態なのかと思うところもあると思うが、そこも含めて、間口が広がっていくことで、本当に困っている方も相談しやすくなってくると思うので、そこは人員の体制として忙しくなるとは思いますが、相談を巡る人流が増えていくというか、そこを通っていく人が増えていくという場所はすごく大事なことになるのではないかと思った。

(委員) 前も話したが、ひきこもった経験があると、何かあったときにまた戻ってしまう可能性もあるので、サポート等はとにかく長い目でやってほしい。

(委員) あなたらしい生き方というのは応援されている気持ちになる。

(会長) やはり自分で抱える人が多いだろう。良い方向に行ったけれど、また戻ってしまうという人もいるので、息の長い支援をぜひお願いしたい。

(副会長) 本人からの電話や来所の相談がたくさんあることが表しているのは、ひきこもり状態にあっても力がある人がたくさんいらっしゃるということだ。

3 豊島区ひきこもり支援3年間のまとめ(案)について【資料3】

(事務局) 概要について説明

(会長) 最初に豊島区の特徴のようなものがあるとよい。

(副会長) 7頁から9頁あたりに、ひきこもりの窓口を設置する前から今に至るまでの、充実して変わってきた部分を、絵で表現しているのではないかとと思っているが、その辺りのことのお話を伺いたい。

(事務局) おっしゃる通りひきこもり窓口を設置してから豊島区として動いていたビジョンの紹介や、くらし・しごと相談支援センターとの連携を載せ、それが今のひきこもり窓口に繋がっているといったイメージをのせたかった。伝わるように修正していきたい。

(副会長) 絵の書き方は難しいと思うが。実感で良いので、取り組まれてきてここが変わってきたとか、ここは立ち上げ当初は気づいてなかったけれど、今はこういうふうになってきたといった考えや実感があればぜひお聞きしたい。

(事務局) 窓口ができる前から各窓口でそれぞれひきこもりの相談を受けることが非常に多かったことから、区として専門窓口を設置するきっかけにもなった。改めて冠を掲げることで、こんなことを言ったら恥なんじゃないとか、言いづらかった方が、窓口があることで相談しやすさに繋がっているのではないかと。直接お声をいただいているわけではないが、家族の相談件数の増加からもそのように感じている。

(副会長) 7 頁は丸々ひきこもり窓口の設置以前の体制と思ってよいのか。

(事務局) 福祉包括化推進事業で、いわゆる重層的支援について記載し、ひきこもりが単体の課題ではなく、複合的な課題になることが非常に多いため、ひきこもり専門窓口がある前から各部署と連携し、検討してきたという区の状況を載せたいと思っている。

(副会長) 7 頁左下の通常の支援体制で、保健福祉部の窓口には色々な相談が持ち込まれると、窓口も苦しくなることがよくあるが、それが右側のようなお互いに連携して助け、助けられ、経験を共有して、そういうことが分厚くなってきたと思う。ひきこもりの窓口がはっきりして、協議会などに聞いたりあるいはその重層的な支援の取り組みが増えたりして、右側のイメージ図がもっと深まって広がっているのではないかという気がしている。

(委員) 母子の相談を受けるところは母子の課題があり、高齢者の相談を受けるところは高齢者、障害は障害というように、それぞれの相談窓口が悩みや課題を抱えている。しかし、困っている方を紐解くと、どこの側面から見ているかの違いであって、この問題はこの窓口では取り扱えないからあっちへということではなく、お困りを持っている方、家族は一つなので、こちら側が繋がって一つのものを見ていこうということを目指すのがこの福祉包括化推進員の取り組みである。そうするとその一つの中にひきこもっている現象の方がいて、困っている家族がいるということを経 8050 という側面で見ると、精神保健という側面で見ると、障害や経済的困窮という側面で見ると、一面的ではなく、それを総合的なものとして捉えて繋がって支援していくことができる。ひきこもりを中心にすれば、ひきこもり支援のための福祉包括ではあるけれども、ひきこもりはその一部だと私は捉えている。

(委員) ひきこもりを窓口の看板に掲げるかどうかでかなり深い議論が行政の中でもあった。当然ながら保健所でも福祉保健部署でも色々なところで、ひきこもりの方々は常に繋がっていたが、その中で看板をかけるかどうかという帰路に立ったときに、自分がどこの相談に行ったらいいか迷っている方も多いという意見をたくさんいただき、手探りながらも窓口の看板を掲げた。その中でこれだけの相談実績も作れてきたし、掲げたことでのメリットの方が大きかったと感じている。

(会長) 相談窓口の明確化はとても大事なことだ。

(委員) ひきこもりという言葉を使った方がよいと思っている。強烈な印象があって、世の中で悪い印象があるかもしれないが、ひきこもり窓口とはっきりあれば、そこに行けばよいと本人がわかるのではないかと思う。

(委員) 色々な側面で、本人だけでなく家族もいっぱい状態。すぐに介護者の集い等を作った方がいいのではないかと考えている。50 代がここまで多いということは、同居者がケアをしている。家族をケアしている本人も豊島区以外の状況を見ても増えているし、家族会では電話相談も肌感覚で増えている。色々な状態でひきこもりは当てはまっていると思う。そこから自分に合った居場所や、集いの場所、繋がる場所に繋がっていければ、目指すところは 1 人ぼっちにならないとい

うことだと思う。逆に支援員も同じで、この図を見ていて、多様な生き方があって多様な悩みがあって、多様な状態像で年代もある。ひきこもりという少し強い言葉というのはまだまだ偏見が多い言葉だと思うが、掲げていただき、素晴らしいと思っている。また色々な事例が掲載されるとよいと思った。

(会長) 支援者も戸惑っていて、どう対応してよいか困っていた中で、豊島区は窓口を明確化し、そこで集約してしっかりと相談ができるようになったことは大事なことだったと思う。この3年間のまとめで、今はひきこもり窓口の変遷のような話が出たが、いかがか。

(委員) 子供をひきこもりにさせてしまったことに対し、親に非があると思ってしまい、相談することができなかった。このような機会に参加させていただき、どんなことでも相談できればよいと思うようになった。

(委員) 3年間で、ひきこもりの人をサポートできる窓口があるということ、広報などを使って世の中にできるだけ広げていったのだと思う。ひきこもりということが、悪いイメージではなく、サポートを受けていい人や、ひきこもりの人がいたらサポートしなければいけないとか、そのような感じの世の中の雰囲気になっているので、例えば履歴書を書くときに一番困るのはひきこもりの間の空白なので、そこにひきこもりでサポートを受けていた等と書けるような、そのような世の中が来たら、社会がそう認めてくれるようになれば良いと考えている。

(事務局) 今年度のひきこもり支援方針は、3年度に皆様と作った支援方針から追加していく。昨年は1-1ダッシュの部分で家族支援の強化をしたが、来年度以降使う支援方針として、まだこんなものを支援強化した方がよいのではないかなど、ぜひ意見を賜りたい。

(委員) 先ほど家族支援という話もあったが、やはりひきこもりだけ見ているとわからないことはたくさんあり、喪失感や絶望感、子育ての自責感、私は親失格なんじゃないかという思いに苛まれて、母親は何重にも抱えられている。仕事も今はしていない状態で、また仕事したらいいのかどうか、でもこの子を置いて仕事していいのか等、このような家族の状態像のイメージをぜひ持っておいていただきたい。あくまでひきこもりの親として見るのではなく、1人の苦しんでいる方がいるというように家族も見えてほしいし、もうすでに来ていると思うが、ぜひ相談にもつなげてほしい。そういう相談はなかなか繋がっていない方がいらっしゃる気がする。

(会長) 行政の窓口だけでは受け止めきれない部分があるから、色々な主体の説明会があったり、居場所があったりすると思う。ピアサポートを今年度始めたりしているが。

(副会長) 7ページを見ているが、左側の通常の支援体制には人がいないが、右側には人の姿が真ん中にある、それぞれ支援する立場の人が自分の角度から見ると自分の視点でしか見えないが、他の人がどういう視点で見ているのかも話ができて、多面的にその方の生きている姿、素敵な姿も一緒に見ていくことができる。みんながこういう未来がいいよねというイメージを分かち合いながら、取り組んでいる感じがじわじわと伝わっていくのではないかと感じている。どうしても支援して

いる側自身も自分の悩みを表に出しづらく、支援者もひきこもってしまうところがあると思うが、繋がり合えるところがよい。顔の見える繋がりを作っているところが希望に繋がっているような気がするので、多くの歩みをまた次の期の歩みへと繋げていけたらよい。また、誰が読むのか気になった。タイトルがそっけなく、威圧的な言葉が踊っているから、何かメッセージというか、伝えたい副題等があるとよい。行政文書のように受け取れてしまう。

4 各委員からのご意見・情報交換（最近のひきこもり支援の状況など）

（委員）貧困の問題は生活保護の問題であるため、行政と両立していくが、行政が義務としてそのような問題を解消するという、非常になくってはならないものである。しかし、不正受給を防ぐために支援を受ける側との間に緊張関係がある。ところがこのひきこもりの問題で、豊島区がホームページやサポートする体制を作っている姿勢というのは、行政の対応として少し違った形であり、本当に支援の必要な人の側に立って、区という自治体が、自分たちの力を非常にソフトにやってきたのではないかと思っている。行政はこんなアプローチができるのかと、行政の可能性を感じさせてもらえたとし、そういう実績が今積み重なっているのかと実感した。これからも取り組みを続けていき、行政としてもサービスの提供だけでなく、第三者と一緒に作るような雰囲気在今后も作っていけたら、大変良いものができるのではないかと思った。

（委員）3年間携わらせていただいて本当に感謝している。色々なことを聞き、自分自身と当てはめて色々と考えていた。正直またひきこもりに戻りそうになった時もあったが、ひきこもりの委員をやっている人がまたひきこもりになったらいけないと思い、頑張った。そういう意味で、委員になり、この会に出席させていただいているということが、自分にとってひきこもりでなくてきちんとやっていく自信に繋がるような、そういう場でもあった。様々な意見を聞かせてもらって本当に感謝している。

（委員）やはり自分がわかるということが大事だと感じた。ひきこもっているからのような感じで言われている部分もあったので、そこから出て、3年間この会に出席でき、よかった。

（委員）民生委員・児童委員としての仕事は、まず福祉が一番大事だと常に考えながら行動しているが、この協議会で3年間勉強させていただいた。ひきこもり相談窓口のネーミングをどうするのかから始まり、やはりわかりやすい方がよい、単刀直入の方がよいということで、決まったのを覚えている。そして当事者の委員からも、ひきこもりはわかりやすい方がよいという言葉をいただき、それでもひきこもりという言葉に強い感じがあるということで、温かみのある広報特集号を出していただき、私もこの3年間、民生委員として携わらせていただいたが、とても勉強になった。さらに勉強していきたいと思っている。

（委員）ここまで事業が充実してきたことを見ると、立場上、事務局の苦勞がわかる。言葉で主にコミュニケーションをとる動物である人間として、言葉が大事だと思った。皆さんおっしゃっているように、生きづらさや新しい生き方、ひきこもりという言葉を使って、アクセスしてもらおうという、そのひきこもりという言葉を使ったことで、言葉を大事にするということのも必要だと感じた。また、自分が自分の在り様を見つめ直したり、人生観が変わるような3年間の体験をさせていただいた。おそ

らく家族とのコミュニケーションも以前より少し柔らかくなっているのではないかという気がしている。本当に皆様に感謝している。

(委員) 3年間の素晴らしい実績を伺い、わかりやすい窓口ができたことは本当に良かったと思っている。ただ、まだ窓口情報が届いていなかったり、逆にひきこもりという言葉を使うがためにそこに来ない人がいること等は常に考えなければいけない。そうは言っても窓口だけで何かできるわけではないので、様々な方に関心を持っていただき、関わっていただけるような地域作りが必要だ。やはりどの窓口でもこういった状態像にある方については、どのような支援が必要で、支援するということだけではなく、寄り添っていくことが必要なのだとすることを様々な方に知っていただきながら、先ほどの図の通り、繋ぐ意識で取り組んでいくということが非常に大事だと思う。本人が SNS 等で情報を出しているが、気づかずにうまく繋がらないということがないようにすることは、非常に大事だと思う。何かよくわからないことは当事者に聞けというのが、周りがいろんな思いを巡らせたところで、それは想像でしかなく、やはり実際にそういう思いを体験している人の言葉の方が重い。地域の中で皆さんにそういう意識を持ってもらうような取り組みが、色々な人に見てもらえるようなものになっていくと、今後の3年間でも広がりが出てくるのではないかと思った。

(委員) 高齢など色々な切り口があるけれど、それはこちら側の勝手な切り口で、本人や、家族から見たら、ひきこもりということが困っている。そのことをズバっと表したものを行政で掲げたのはすごく大きいのではないかとと思っている。3年間のまとめも本人や家族が読む視点で作ると、もっと思いが伝わるような内容になるのではないか。私自身も勉強になり、色々なことを感じたり考えさせられたりするような会だったので、皆様に感謝している。

(委員) 委員の皆さんが当事者家族に寄り添って考えていることがわかるような発言をしていくたびに、温かい気持ちになっていた。それぞれの立場からの経験に基づいて、豊島区のひきこもり支援について意見を伺えたのは、とても貴重な経験になった。アンケートで当事者の声をしっかり聞き取って、その声に応えるために、相談しやすい窓口を作ったり、専用のホームページを作ったり、そういった豊島区の取り組みが先駆的だということを改めて知って、嬉しい驚きだった。子供食堂やフードパントリーを地域で行っているの、地域の中で理解者を広げるために、そういった居場所でお喋りするような感じで、堅苦しくない啓発の講座や、フードパントリーにカフェを併設して、お喋りの延長戦で困っていることが聞けるような関係性を作っていけたらよいと思っている。ひきこもり支援と聞くと、何となく福祉かと思うが、福祉だけではなく、地域や商工の担い手の問題にも繋がっていると思うので、皆で取り組んでいくことで、枠が増え、誰1人取り残さないような地域をデザインできると思っているので、それが豊島区の魅力にも繋がっていくとよい。

(委員) 本当に耳を傾けていただいた3年間だったと思う。発言したことが一つ一つ形になっていくのが、目に見えてわかって、自分の声の後ろにたくさんの家族の声があるので、受け止めていただいたことに本当に感謝している。最初に豊島区長にお越しいただいた時もそうだったが、この熱意というか、区長のスタートを切った言葉から実現に向けて動いた3年間だったと思っている。届けたい相手にしっかり届けるというメッセージが本当に大事だと思う。伝え続けること、届け続けることがいつになるかわからないし、そのタイミングは本当に1年後3年後5年後10年後かもしれない

も、届け続けることだと思う。だからこそひきこもり相談窓口そのものが長く繋がっていける居場所になってほしい。生きることと同じだと思うので、期間を区切るのではなく、少しブランクが空いてもまた顔を見せられるような、そんな人の顔が見える窓口にこれからもなってほしい。たくさんの声を届けさせていただけて、本当に感謝している。

(副会長) 支援者自身が回復することの大切さを感じ、困っていることも表に出して、みんなで話をして、温かい繋がりの中で自分が回復する。この自分が感じた温かさが関わらせていただく皆様と温かい関係を作っていくことに繋がっていくのではないかと、それが伝わっていくということなのかと感じている。この協議会で画期的だったのは、3年間かけて一緒にデザインしていったことだと思う。行政だけが突っ走るとか、支援者だけが考えると、そういうことではなく、ともにデザインする時代へと変わっていく必要があるのではないかと思います、そのプロセスの中で、当事者の声に支えられた3年間でもあった。ひきこもりという看板を表に出して、そういう現象にも温かい社会ができれば、きっとひきこもりに関わらず、皆にとって温かい社会なのだろうと思う。

(委員) 最初は相談支援も手探り状態でどうしたらいいかわからないような状況の中で、皆さんと支援方針を紡ぎ出すために、協議会をやらせていただいた。第1回目は印象に残っており、会長からひきこもり支援は当事者の視点がとにかく重要だと、そこに軸足を置いてやっていこうという話があり、いつも迷うと軸足はここだと思い返すようなきっかけになったかと思う。また当事者の委員も心に残ることを言うくださり、自分は相談できるような状況にないと思っていたとか、相談窓口があると知っていたら、もっと早く相談できたというようなお話もいただいた。他の委員からも相談窓口でどんな相談ができるのか、どんな支援が受けられるのかがわかっていくと、相談者が増えたり、繋がりやすいというような意見をいただき、この第1回が一つのきっかけで大きく動き出せたと思う。特に情報発信は、工夫をし、力を入れてきた。一つの言葉やフレーズも、区長共々考えに考え抜いて、ベストではなく、ベターを目指して頑張ってきた。それも3年間の積み重ねがあったからこそだと思っている。令和3年度はまだまだ行政でも迷いながらの状況だったが、令和4年度に2年目になって、ようやく少し方向性が見えてきて、当事者の視点はこういうものなのではないかというのをすこしずつ実感し、それが令和5年になって、だんだん自信に繋がってきた。感謝しきれないぐらい感謝している。今後は、豊島区の窓口やイベントに参加された方が、今の自分でいいのだと確信を持てたり、こうなりたいなと自分の道を見つけていただくのが一番だと思うので、そのようなサポートができれば最高だと思っている。支援方針も、この協議会でブラッシュアップさせていただき、これからもより良いものを突き詰めていきたいと思っている。これからも様々な立場でご支援いただければと思っている。

(会長) 司会進行役で皆さんの思いを自由に表現していただけるか、またそれぞれの語った思いをみんなで共有し、じっくり考えて、というその繰り返しの作業だったと思うが、それを上手に事務局が言葉にして発信をしていただき、とても良い会だったと思っている。ひきこもりというテーマに関わり、当事者から学ばせていただいた、そんな思いを語った第1回だったが、それを続けてこられてよかったと思っている。この3年間を一つの区切りにして、またこの雰囲気、思いを続けていけたらよいと思っている。

(事務局) 皆様の意見を伺い、自分たちももっとブラッシュアップしていかなければと、しっかり反映してまいりたい。今、マルエツやサンシャイン等の民間企業にご協力いただき、カラー刷りのチラシを配架している。さらに、もっと手元に取りいただきやすいよう、三つ折りバージョンも作成中。以前協議会でカード型にしたかどうかといった意見をいただき、そちらも来年度作ろうと思っている。着々と形にして、ひきこもり窓口の普及をしていきたいと思っている。委員の皆様には3年間ご助力いただきありがとうございました。

(会長) これをもって、令和5年度第2回ひきこもり支援協議会を終了する。

閉会